

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	基礎的・基盤的知識の修得と生命科学に係る実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の3つの科目区分に授業科目を配当している。専門教育科目では、生命科学の基礎科目をはじめ、動物・植物・細胞分子機能の各分野に特化した最先端の知識と技術を修得し、専門性の高い卒業論文研究に導くための科目も配当している。	入学時にリメディアルテストを実施し、大学教育を受けるにあたって不足している基礎学力を補う授業を設けている。全学年に渡り学業不振者には担任が最低でも半期に一度は面談し、学習指導を実施している。一方で、1年次より授業の一環として大学院生の研究ポスター発表会に参加する機会を設け、修学意欲の向上を図っている。学生による授業アンケートを教員にフィードバックする他、全学FD委員会での議論等を通し、定期的に効果的なカリキュラム改正を行っている。	講義履修生には、事前に評価方法を明示し、試験またはレポートを客観的に点数化することにより、公平性かつ適正性を確保している。学科での卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	卒論計画発表、卒論中間発表、卒業論文研究発表、ならびに卒業論文審査を、複数の教員により行い、学生のディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。	教育課程の編成や実施方針の適切性については、適宜、学科所属の全教員により、学科会議において慎重に議論され決定されている。またシラバスなども授業担当教員以外の教員（第三者）が評価している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な生命体や生命現象に関する基礎知識を広く修得するとともに、実験実習を通して実践的な研究技術を修得する。	【長所】 ・担任を繰上制にし、研究室配属前の1から2年生までを経時的に同じ教員がフォローできるようにしている。3年次以降は研究室の教員が配属学生をフォローしている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・2年次から実習科目を多く配当している。また、外国語科目は英語に特化して3年次まで必修科目を配当している。	【特色】 ・様々な水準でバイオサイエンス分野に必要な知識を取得する機会を設けている。	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	履修の手引き、シラバス、学生生活ハンドブック	履修の手引き、シラバス、指導報告書	履修の手引き、学生生活ハンドブック	卒論計画発表要旨集、卒論中間発表要旨集、卒論発表要旨集	学科会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、生命科学に関する強い関心を持ち、食料、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。学生が入学するにあたり必要な知識については、入試科目として示している。これらは入試要項、大学ホームページ等に記載している。また一般入試や共通テスト利用入試といった筆記試験による選抜方法の他に推薦入試、社会人入試、外国人入試等を実施し多様な学生を受け入れる制度をとっている。推薦入試では小論文と口頭試問を行うことで、入学後の修学に十分な基礎学力、これに加えて生命科学に関する問題意識や論理的思考、多様な人々との協調性を持った学生を選抜している。学科長を中心とした学科教員による入試判定委員会により合否判定を行うことで公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	入試制度別の入学者数の把握を行うことでアドミッション・ポリシーに基づいた入試制度が機能しているか点検を行っている。過去4年の解析の結果、入試制度別に学生の卒業時の平均GPAを比較すると有意差は認められず、入学者選抜方法は適切であると判断できる。また、入試の制度に応じて入学後の学生の成績や高等学校ごとの志願状況などを把握し、指定校推薦入試に関しては状況に応じて指定校の再検討を行っている。公募制推薦入試に関しても口頭試問（面接）において基礎学力を評価できる方法を活用することで、最低限の学力を担保できるよう努力している。学科会議内で入試制度別の受け入れ人数や試験科目の見直しについて議論を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多種の入試を行うことで、多様な学生が入学する環境となっている。就職状況からも多くの卒業生が食料、環境、健康系の企業に就職しており、求める学生像に沿っていると考えられる。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・生命科学に関するより高度な専門知識の習得を求めて、毎年大学院へ一定人数が進学している。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	入試要項、大学ホームページ、就職状況一覧	入学者情報、学生の成績表など

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に基づき、バイオサイエンス学科では、生物と化学を基盤として、個体内、さらには、細胞内の生命現象を分子機能の観点から理解する生命科学を修得させて、農学、さらには、産業に応用できる専門家を養成するための専任教員を配置することとしている。専任教員の採用は原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等、教員に求める資質を明示している。	専任教員として、教授 10 名、准教授 5 名、助教 3 名の計 18 名（男性教員 15 名、女性教員 3 名の体制）とし、文部科学省の設置基準を上回っており、十分な教育・研究指導を行うことが出来る。動物、植物、細胞分子機能の 3 分野に、各 6 名ずつ教員を配置し、適切な採用・昇任を行っている。また、担当授業は分野で均等になるように配置することで、1 教員当たり担当講義数は偏ることなく配当している。	令和 6 年度は新規の募集・採用は行われなかったが、昇格申請があった。学科の教授により構成される人事委員会により、職階ごとに「東京農業大学における教員採用・昇格に関する条件」を定め、「研究業績得点化表」・「教育・管理業務・社会活動評価得点化表」に基づき、審査を実施した。承認申請は、その後、全学的な人事専門委員会と教授会にて審査が行われた。	毎年、自己教育評価を実施し、授業・研究指導・国際交流・大学運営・学外活動の評価している。授業については、上記に加えて学生による授業評価を実施し、授業向上に取り組んでいる。また、先端研究を推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であることから、原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請することとし、年度末に外部資金申請者を確認している。	平成 29 年度より動物・植物・微生物・機能性分子の 4 分野体制を動物・植物・細胞分子機能の 3 分野体制とする新体制となった。平成 29 年度まで 1 名だった女性教員を平成 30 年度より 3 名に増員したことで、より細やかな女子学生への対応可能となり、女性視点からの意見を得られる機会が増えた。また、国際化の推進を図り研究・教育にそれを還元すべく、学科教員の留学を推奨し、実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・生命科学の幅広い専門分野に渡る教員を配置している。	【長所】 ・学科を構成する 3 分野にバランス良く均等な教員数を配置している。	【長所】 ・点数による明確な昇格目標を提示している。	【長所】 ・競争的研究資金の獲得を推進しており、採択されている教員の比率が高い。	【長所】 ・3 分野に各 2 研究室とバランスのよい 6 研究室体制をとっている。1 研究室に複数の教員が配置されていることから教員留学時の学生教育も円滑である。
	【特色】 ・生命科学の幅広い分野の人材を確保している。	【特色】 ・3 分野 6 研究室に各 3 名の教員を配置している。	【特色】 ・特になし	【特色】 ・競争的研究資金への申請を積極的に行っている。	【特色】 ・複数の女性教員を配置している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	設置の趣旨（文科省提出資料）	大学案内	東京農業大学における教員採用・昇格に関する条件、研究業績得点化表、教育・管理業務・社会活動評価得点化表、大学教員専任化審査判定表	自己教育評価 授業評価 科学研究費助成事業データベース	大学案内

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	文部科学省に対する設置申請に基づいた教育課程を編成している。旧カリキュラムの見直し結果を踏まえて、2024 年度カリキュラムの運用を開始した。	授業の実施方法として、本年度は対面形式に加え、一部遠隔形式を併用したことにより効果的な方法で実施出来た。低学習意欲の学生情報を教員間で共有し、必要に応じて面談も実施した。	事前に評価方法を明示するとともに、適切な成績評価に努めており、問題は発生していない。	卒業論文に関して、中間発表会や卒業論文発表会を複数の教員により行い、学位授与方針に従った評価を行っている。	教育課程及びその内容、方法の適切性に関して、2024 年度に開始したカリキュラムの細部を検討した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 適正状態の継続	【問題点】 適正状態の継続	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・2024 年度カリキュラムの実施と効果の検証	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・2024 年度カリキュラムの実施と効果の検証
根拠資料名	講義要項	講義要項	授業評価アンケート	中間発表会資料、卒業論文発表会資料	なし

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本年度もこれまでと同様の学生募集、入学者選抜を行った。募集の制度は適切であり、入学者選抜方法は公正である。推薦入学については面接官による不公平が無いよう、質問内容や審査基準などを可能な限り統一した。事前課題に関する質問事項にも重点を置き、学術的な理解度も測るよう努力した。昨年度に引き続き、指定校の範囲を拡大し志願者の開拓を行ったところ、大幅に志願者が増加した。	種々の入試制度別に学生の受け入れ方針に基づいているか点検するとともに、推薦入試に関しては入学後の学習意欲や習熟度を追跡し、指定校の選定などに反映させている。本年度は、指定校を拡大し、一定の志願者増加が見られたが、即効的結果だけでなく、数年かけての影響も継続的に観察する必要がある。多様な受験制度により、高校で化学を履修していない学生が一定数見られるが、化学に関して高い意欲の学生が多く入学している傾向は継続されている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学に対する高度な専門知識を求める学生が多く、大学院進学希望者も多い。	【特色】 ・化学に関して高い興味を持つ学生が多い。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・年内入試による学生確保数は順調に伸びている。年内入試により入学した学生の理解度について注視するとともに、指定校の選択や広報戦略の検討を継続的に行う。	【課題】 ・特に推薦入試もしくは国語、生物等の科目で受験した学生に、学科教育内容とのミスマッチが発生する傾向が高い。
根拠資料名	なし	入試要項

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科設置の趣旨に基づき、農学・生命科学領域において化学的知識に基づいた展開可能な基礎力を駆使し様々な案件に対応可能な人材を養成可能な専任教員を配置する方針としている。教員の公募、採用時には本方針を明示している。	専任教員14名（教授7名、准教授3名、助教4名）を2分野（有機化学分野、分子機能解析学分野）にバランス良く配置し、十分な教育・研究指導が可能な体制を整えている。本年度は教員の昇格も検討した。	教員人事に関しては、学科内の専任教授よりなる人事委員会を組織し、大学の定める「教員採用・昇格に関する条件」に基づき判断している。次年度より1名の准教授を教授に昇格することを決定した。また次年度は助教1名を採用することにより教育体制の拡充を計った。	各種の研修を通じて教員としての資質向上をはかっている。また、自己教育評価や学生による授業評価を通じた評価体制が整っている。	教員の資質や年齢構成を総合的に判断しながら教員の配置を行っている。本年度は1名の准教授の教授昇格を決定し、継続的な教育・研究体制の維持を図っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事
根拠資料名	設置の趣旨	学科ホームページ	人事申請資料	自己教育評価 授業評価	なし

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子微生物学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科内に教授会に加え教学検討委員会を設け、各授業科目の内容や関係性、学生の理解度など総合的に評価、改善を行っている。 なお、教学検討委員として教授、准教授、計 11 名で構成されている。	学科内の教学検討委員会にてシラバスの内容確認や科目の連携など適宜活性化のための検討を進めている。 また、演習科目として最新の研究紹介などを行い、学生のモチベーションアップを心がけている。本年は学部 2 年生にも院の中間発表会を公開した。	大学の評価方針に従い、適切に成績評価および単位認定を行っている。GPA が低い学生には指導を適宜行っている。	全教員で学科 GPA の確認やスコア向上のための努力を行っている。また、授業評価の結果を受け、学生の学習状況を把握している。TOEIC の積極的な指導も行い 2 年生、3 年生を中心に試験への全員参加を目標として行っている。	多くの科目を 2 名以上の複数の教員で担当しているため、客観的な視点で改良を行っている。シラバスチェックも活用する。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・発表する能力の向上	【長所】 ・理解度の向上 ・モチベーションアップ	【長所】 ・なし	【長所】 ・授業評価に基づく授業の改善	【長所】 ・複数教員での授業進行、内容および方法改善
	【特色】 ・1 年生の前期・後期でそれぞれプレゼンをする演習科目を配置、経験を積ませている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・一般的な質問の他、個別に学生からのコメントを収集している。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	シラバス（教務課）	フレッシュマンセミナーシラバス 共通演習シラバス （教務課）	低 GPA 学生への指導報告書	GPA グラフ（教務課） TOEIC の成績表の解析	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の方針に基づき、HP や大学案内などでアドミッションポリシーを明確に示している。また、学生募集に関しては受験者に対する進路相談を複数回行っているとともに、高校への出張講義・出張実験、体験実験の受け入れを行っている。入学者選抜に対しては共通テスト、大学独自試験以外に指定校推薦や一般推薦、実践スキル総合型やキャリアデザイン総合型選抜入試も取り入れ、多様な学生受け入れや全国各地域から受験できる様な体制を整えている。また、推薦の面接には複数の教員で対応し、適切な選抜を行っている。指定校は毎年入学学生の成績や入試実績を考慮して見直しを行っている。	入試選考会議や学科会議にて、学生受け入れの適切性を適宜議論し、これを受けて学生受け入れ基準の見直しを行っている。また、入学後の学生に対し、出席や成績などの追跡調査を行い、これらが不十分な学生から聞き取りを行い、選考基準の見直しを進めている。 また、上述を踏まえて学生募集の手法などの改善も適宜行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・東京近郊からだけでなく、遠方からの学生も集めている。 ・共通テストおよび大学独自試験で受験しない高校から指定校推薦で受験してくる。 ・指定校推薦にて、受験生の大幅な応募と合格を達成した。	【長所】 ・学生募集や選抜時だけでなく、入学後の学生からの聞き取り、指導の中から生まれた改善すべき事項に対して速やかに対処している。
	【特色】 ・推薦制度を利用し、全国各地から学生を集めている。 ・推薦制度を利用し、多様な学生を集めている。	【特色】 ・在学生に対する個別対応の中から学生が何を求めて入学したのかをより明確にし、選抜にフィードバックできる体制を整えている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	指定校リスト（入学センター）	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	HPおよび冊子での大学案内、募集要項および学科パンフレットにて方針を分かりやすく説明している。学科パンフを更新した。	学科内に教学検討委員会、機器備品検討委員会、広報委員会を設置し、より良い教育・研究体制を整えている。クラス担任は年代事にバリエーションを取り入れて対応している。	教員募集や採用については学科内教授会で基準を設けている。 半年に一度専任教授会にて全教員の業績を確認し、昇格の規定を満たしているか、将来的にどのタイミングで昇格できるかを議論している。教員採用の際は、教育経験に加え、年齢幅も考慮している。	学内で行われる勉強会などにはできる限り参加するように努めている。専任教授を中心に各種委員会に所属し、大学の方向性の確認や学科としての対応を常に考えている。	学科専任教授会を中心に、適宜、学科、分野、研究室の教育研究の内容確認および方向性の明確化を進めている。自己点検は定期的に更新しており、適宜内容を確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・受験希望者が理解しやすい手法をとっている。	【長所】 ・各種委員会で適宜熟考し、学科会議で議論し最善の手法を決める。	【長所】 ・適切な募集・採用・昇任を進めている。	【長所】 ・教員の様々な事象に対する対応力が向上している。	【長所】 ・教員個々の自由度を保ちつつ、必要な点検・改善を進めている。
	【特色】 ・キーワード、センテンスなどで理解度を上げている。	【特色】 ・専任教員は職階に関係なくいずれかの学科内委員会に所属する。	【特色】 ・採用・昇格には本人の研究・教育の技量をプレゼンで確認している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	学科紹介パンフレット、HP (入学センター)	機器備品リスト（会計課）	人事資料（学務課）		研究業績（学務課）

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	教育の理念である「実学主義」に基づく体験型カリキュラムを多く取り入れた実習や実験を通して、集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う。また、データサイエンス分野など新しい分野にも対応できる力を養う。	学科の教育上の目的である「バイオサイエンスに関する専門的な知識と技術を習得し、一つの課題に対して自立的に解決できる能力を身につけさせる」について、研究室における専門教育により達成させる。またサイエンスの共通言語としての英語の能力を身につける。	学科全体としてのディプロマポリシーの達成状況を判断し、教育体制の改善に役立てる。
実行サイクル	4 年サイクル（令和6年～令和9年）	4 年サイクル（令和6年～令和9年）	4 年サイクル（令和6年～令和9年）
実施スケジュール	共通演習（1年次）、実験実習（2年次～3年次前期）、情報基礎（1年次）あるいはデータサイエンス基礎（3年次）などにおいて教育指導する。	研究室における専門教育の実践：3年次前期の研究室配属後に、研究室ごとにバイオサイエンス基礎実験およびバイオサイエンス応用実験で専門知識・技術を習得するためのトレーニングを行う。4年次においては、卒業論文研究の計画発表会、中間発表会、卒論発表会を行い、達成度に応じた教育指導を行う。また、実用英語（2～3年次）、科学英語論文購読（3年次）などで達成度に応じた教育指導を行う。	ディプロマポリシーの達成度評価：研究室ごとに4年次の卒業論文および論文発表会を審査し評価する。また、卒業時にポリシーの各項目に対する自己評価アンケート調査を行い、学科全体のポリシー達成度をモニターする。
目標達成を測定する指標	共通演習、実験実習、情報基礎などの出席状況や単位取得状況により判断する。	3年次のバイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験における出席状況と評価、および4年次の計画発表会、中間発表会、卒論発表会の評価により、達成度の最終判定を行う。また、実用英語や科学英語論文購読などにより評価する。	卒業論文の評価をもって学生個々人のポリシー達成度を判定する。また卒業時のアンケート調査結果を集計し、卒業論文の評価と併せて学科全体としてのポリシー達成状況を判断する。さらに、新たな教育指導体制に対する評価を行う。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	共通演習（1年生対象）、実験実習（2年～3年生対象）において教育指導を行った。	科学英語論文、バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験（3年生対象）、卒業論文（4年生対象）において研究指導を行った。また、TOEICなどの受験を2年次は必修とし、それ以外の学年でも受験を推奨した。	卒業論文（4年生対象）における研究指導を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・共通演習では、あるテーマに対してグループで調査し情報をまとめ、プレゼンテーションするというタスクを課している。これにより、主体性や協調性を養成していくことができる。 ・実験実習は長期（約1年）にわたるため、同学年の集団内コミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う十分な時間を提供することができる。	【長所】 ・バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験は、卒業論文研究に取り掛かるための専門知識・技術を習得するためのトレーニングと位置付けられる。従って、卒業論文研究完成という最終ゴールまでの達成度を、個々に追跡することができる。目的意識を持って TOEIC 対策することで、得点が上昇し学習効果が可視化されることから、さらなるモチベーションの向上と、良い学習循環につながる。	【長所】 ・卒業論文発表会と提出された論文の内容、自己評価アンケート調査により、ディプロマポリシーの達成度を個々に評価することができる。また、評価内容は改善点を明確化するための資料となる。
	【特色】 ・実験実習は、「無機化学実験」、「有機化学実験」、「微生物学実験」「生化学実験」「基礎生物学実験（一）」「基礎生物学実験（二）」の6つからなる。それぞれの実験は学問分野や操作方法で異なる点が多く、実験を速やかに遂行するためには、特に集団内でのコミュニケーション能力や協調性を身につけていることが必要である。	【特色】 ・卒業論文研究を遂行するためには、実験や国際科学誌から情報を収集する能動的な行動が必要である。従って、科学英語論文購読、バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験、卒業論文を通してアクティブ・ラーニングを実施するためには最適な科目である。	【特色】 ・卒業論文研究を通して、卒業後の社会に貢献できるスキルを身につけることができる。

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・卒業論文研究への着手が難しかった学生が数名存在した。
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・様々な障がいにより通学できない学生が数名いる。その原因は、近年多様化しており解決が困難になりつつある。本学健康増進センターのカウンセラーと密に情報交換することにより改善が見られている。今後も、本学健康増進センターとの連携を継続する。
根拠資料名	共通演習（1年生対象）、無機化学実験、有機化学実験、微生物学実験、生化学実験、基礎生物学実験（一）（2年生対象）、基礎生物学実験（二）（3年生対象）の評価	科学英語論文購読、バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験（3年生対象）、卒業論文（4年生対象）の評価	卒業論文（4年生対象）の評価および卒業論文の授業評価アンケート

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を一層推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であるため、外部からの競争的研究資金やその他助成金を積極的に申請し採択を目指す。	学会発表や学術論文等を通して、最新の研究成果を国内外の研究コミュニティに発信する。	社会への発信力強化の一環として、一般向けの講義・講演会やネット・印刷物等を通した研究成果発信を推進する。
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（令和 6 年～令和 9 年）	____ 4 ____ 年サイクル（令和 6 年～令和 9 年）	____ 4 ____ 年サイクル（令和 6 年～令和 9 年）
実施 スケジュール	原則として教員全員が、科学研究費補助金（採択課題の継続申請を含む）をはじめとする競争的研究資金に申請する。私立学校施設整備費補助金などにも積極的に申請する。	全研究室がそれぞれ国内・国外の学会、ワークショップ、セミナーや国際学術雑誌等で研究成果を発表することにより、的確なプレゼンテーション、さらに研究者間でのコミュニケーションにおける専門的なディスカッションを行う。	学科教員が、学内・学外で模擬講義、出張講義および講演会などを実施することにより、一般向けの発信活動を行う。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツを検討・改訂することにより、メディア発信活動を行う。
目標達成を測定する指標	学科の外部資金申請者を確認する。	研究室ごとの国内学会、国外学会、国際学術雑誌等での成果発表回数を確認する。	学内外での模擬講義や講演の回数を確認する。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	概ね、全ての教員が科学研究費補助金等の競争的研究資金に応募しており継続申請も含め、合計 47 件の申請を行った。また、私立学校施設整備費補助金の学内選考にも申請した。	学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表に努め、研究成果を論文として国際科学雑誌へ 29 報掲載した。 学会発表、招待講演、招待シンポジウムを含め、国内において 114 件、国外において 9 件の発表を行った。また学術的なセミナーにて 7 件発表を行った。	学科ホームページの更新を行ったほか、各研究室のホームページは延べ 14 回の改訂を行ったほかパンフレットの更新も行った。 オープンキャンパス（令和 6 年 8 月 3 日および 4 日）における模擬講義や出張講義を 13 件実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科に所属する全ての研究室（研究分野）が申請できている。	【長所】 ・学科所属の研究室は、国内外において毎年研究発表を行っている。	【長所】 ・最新の研究成果をわかりやすく社会に向けて発信できている。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	総研管轄資料	自己点検システム、所属学会会報	学科パンフレット、学科ホームページなど

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	進学／就職活動への円滑な導入を支援するための学科独自の体制を構築する。	生命科学分野の教育・研究を通じて、グローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換できる指導体制を構築する。	従来型のオープンキャンパス、模擬講義、出張講義、市民講座、学会基調講演に加えて、生命科学分野の研究をわかりやすく社会に発信し、高校生を中心に一般社会への科学の普及に努める。
実行サイクル	___4___ 年サイクル（令和6年～令和9年）	___4___ 年サイクル（令和6年～令和9年）	___4___ 年サイクル（令和6年～令和9年）
実施 スケジュール	3年次前期：卒業生による就職支援懇談会および専攻による大学院説明会の計画 3年次後期～4年次前期：計画の実施 4年次後期：進路内定状況の把握、進路未定者と面談、必要に応じた対応策の策定	4月：留学プログラムの学生への周知。webを活用した外国人研究者によるセミナー・討論会の企画。教員の国際学会への参加の計画。 5～1月：計画の実施（参加は自由意志とする） 2～3月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。	4月：模擬講義や出張講義などの担当者および担当順を計画。 5～2月：計画の実施 3月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。
目標達成を測定 する指標	就職支援懇談会あるいは大学院説明会への出席者数および最終進路調査の回答などを把握して判断する。	留学プログラム相談会への出席者数、外国人研究者によるセミナー・討論会への参加者数、国際学会などにおける発表回数を把握して判断する。	出張講義などの回数およびオープンキャンパス・キャンパスツアー学科ブース来場者数などを把握する他、市民講座の開講や各種メディアでの発表などで判断する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	バイオサイエンス学科卒業生による就職セミナーを実施した（開催日；令和6年11月2日、受講者19人；11月6日、受講者20人；12月5日、受講者3人；12月16日、受講者2人；1月30日、受講者5人）。 バイオサイエンス学科3年生対象就職・進学説明会を実施した（開催日；令和6年5月7日、受講者153人；5月7日、受講者145人；10月18日、受講者10人）。 バイオサイエンス学科大学院入試説明会を実施した（開催日；令和6年5月9日、受講者68人；11月22日、受講者1人）。	学部生に協定校留学説明会への参加を促した。その結果、短期派遣1名（学部）、長期派遣1名（学部3年）の学生が協定先の大学に留学を行った。 外国人非常勤講師（Siddique Shahid 博士；UC. Davis）を招聘し、大学院の授業ならびに学部生・教員を対象としたセミナーの開催を計画・実施した。 教員が海外にて国際学会などで9回発表した。また国際科学雑誌に29報の論文が掲載された。	キャンパスツアー（令和6年6月16日、参加者129人）では研究室を高校生をはじめとする一般に公開した。オープンキャンパス（令和6年8月3日および4日、学び体験来場者2507人、研究室ツアー参加者1335人）、オンラインオープンキャンパス（令和6年8月21日、参加者67人）で模擬講義（2回受講者450人）、高校への出張講義（6回）ならびに高校生と保護者を招いての模擬講義や実習（4回）を実施し、全教員がこれらに取り組んだ。研究成果のニュースを発表するためにHPを改訂し（14回）、高校生や一般市民に広くその情報を発信した。学科のパンフレットを刷新し、印刷物の他にHPからダウンロード可能にした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・現役学生の進路（就職・進学）支援プログラムに本学科の卒業生10名が講師として貢献してくれた。「就職活動を始める前に参考になった」「研究活動と就職活動をどのように両立するか参考になった」など参加学生からは好評を得た。	【長所】 ・学科所属の研究室は、国内外において毎年研究発表を行っている。	【長所】 ・最新の研究成果をわかりやすく社会に向けて発信できている。
	【特色】 ・本学科の卒業生や大学院卒就活に関する有識者（キャリアセンター協力）の講話により、進学、就職、いずれにおいてもキャリア形成をイメージできるような支援を目指している。	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年 度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	就職セミナー開催時の Forms アンケート集計結果	自己点検システム	学科HP、オープンキャンパス実施記録など

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農場実習などを通じて、建学の精神と当学科設置の趣旨を涵養する。	各教科の学生の学習習熟度を把握し、教科間の連携が取れた広汎・総合的知識の獲得を目指す。	全教員が協力して新学科の新入生の教育に努める
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和6年）	__1__ 年サイクル（令和6年）	__1__ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	1年次に「農場実習」を開講し、伊勢原農場、棚沢圃場において野菜、果樹、花卉、水田、土壌調査を行う。「東京農業大学入門」などを通じて学科の教育内容を理解させる	各教科担当教員間の連携を密にし、小テスト、講義内における設問等より学生の学習習熟度及び応用力を測定し、多面的な評価を行う。	全ての教員が1年生に指導する機会（講義、実験、実習）を設ける
目標達成を測定する指標	レポートなどにより学科教員が評価する	期末試験及び専門科目の効果測定や授業評価アンケート等による	全教員が講義、実験、実習を担当すること
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	本年度は伊勢原農場、棚沢圃場において実習を実施した。農場実習では化学を専門とする学生の興味、知識の向上のため、独自の実習内容としている。野菜、果樹、花卉、水田、土壌調査に関する実習を通じて、東京農業大学への理解を深めるとともに、教育に関する本学科の特徴も教授した。	本年度は対面での授業を基本として、一部に遠隔授業を併用する形式で実施した。これにより遠隔授業の利点を共存させ、より効率的で質の高い講義を実施出来た。各教科全般的に課題や小テストなども用いた多面的な評価を実施し、学生の習熟度を把握するとともに、低学習意欲の学生情報を教員間で共有し、サポート体制の充実を図った。	本年度は学外オリエンテーションのほか、多くの対面形式の講義や学生実験、農場実習、共通演習を通じて、全ての学科教員が1年生と接する機会を設けることが出来た。学生情報に関しても、学年担任や学科教員の間で共有することも出来た。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学系の学科でありながら農場実習を必修としている	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・学習意欲の低い学生へのサポート	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・学習意欲の低い学生に対する面談を対面で実施したい。	【課題】 ・なし
根拠資料名	講義要項	なし	講義要項

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究環境維持のために、外部資金の獲得に努める	研究成果の発表を積極的に行う	適切な人事運営と円滑な研究室運営に努める
実行サイクル	____1____年サイクル（令和6年）	____1____年サイクル（令和6年）	____1____年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	科研費を始めとする競争的外部資金や学内の研究プロジェクトに積極的に応募する	卒論生と大学院生や教員が協力した研究活動を通じて教育効果を高め、学会発表や論文の投稿などを目指す	教員欠員枠に対する後任人事を早急に進めるとともに、研究室内外の教員が協力して、教育体制と研究環境の維持に努める。
目標達成を測定する指標	各教員が外部資金の公募に応募したかを評価する	各研究室が研究成果を発表したかを評価する	機器や備品の管理や、教育体制、研究環境の維持が適切に行われたか評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	ほぼ全ての教員が科研費へ応募しており、研究責任者もしくは研究分担者などとして研究費を獲得している教員も多い。	学科全体的に活発な研究活動が推進された。研究の性質上4年生の対外的な発表は少ないものの、主に大学院生の研究成果を論文投稿や学会発表として数多く発表出来た。学部生も学会に参加したほか、学会のアルバイト等の活動も体験した。他グループとの共同研究も順調に進んでいる。	各研究室の研究設備や共通機器である核磁気共鳴装置などの維持・管理は適切に行われるとともに、実験設備の学科内での共同利用なども円滑に行えた。機器管理の役割分担も明確で、本年度着任の新規教員たちも積極的に維持・管理に参画している。今後更に研究室内外の教員同士の連携強化を図る。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・科研費以外の外部資金獲得にも努める	【課題】 ・4年生の段階で学会活動に参加させ、研究意識を高める	【課題】 ・研究活動をより活発化する様な研究室の雰囲気作りに努める
根拠資料名	科学研究費助成事業データベース、農生命科学研究所ホームページ	農大ホームページ、自己点検システム	なし

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	カリキュラム改定の実施	学科の宣伝活動を積極的に行う	年内入試での学生確保
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（令和 6 年～令和 9 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 6 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 6 年）
実施 スケジュール	学科設立時からこれまでに蓄積した知見を基に教育プログラムをの さらなる充実を図り、新カリキュラムを始動した、今年度を含む 4 年間で完成予定であるが、令和 8 年度までは移行期間となり、新旧 カリキュラムが並立する。	学外で行われる進学イベントなどに参加し、学科の魅力について紹介す るとともに、HP などで情報発信する。	指定高校の再選定や高校訪問により優秀な生徒の獲得に努め る。
目標達成を測 定する指標	新カリキュラムへのスムーズな移行と、所属学生の成績、研究、満 足度等を総合して評価する。	学外イベントへの参加数、情報発信を行った媒体について評価する。	年内入試での学生確保数の増加により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	カリキュラム移行に伴う担当科目の引継などを含め順調に開始した。 開講学年の変更があった科目については、2 年次以降の学生の理解度 を注視する必要がある。また拡充した学部共通科目についての教育上 の効果を検証する。	オープンキャンパスの実施を通じて、来学者に対して積極的に学部学科紹 介を行ったが、時間的制約もありやや不十分であった。高等学校への出張 講義も多く対応した。新たな指定校の開拓や、指定校を中心とした高校訪 問を行い進路指導担当者への広報活動を通じて、一定の応報効果は得られ たと考える。	指定校の拡大や評定の緩和などを経て、過去最大の年内合格者数 となった。今後の指定校の範囲、求める高等学校での評定につい ては、年内合格による入学者の成績や、志望のミスマッチにつな がらないかを継続的に注視しつつ慎重に対応する必要がある。一 般入試の受験生は前年並みである。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各開講科目の適切な学年での開講	【長所】 ・特になし	【長所】 ・
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・必修科目から選択科目に移動した科目の教育効果を注視する	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・
根拠資料名	特になし	学部学科ホームページ	

学部・研究科名 生命科学部

学部長・研究科委員長名 坂田 洋一

学科名・専攻名 分子微生物学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	本学科教育目的の一つは微生物のエキスパートを育てることであり、そのためには生物や化学などの基礎的科目から生物化学や分子生物学などの専門的科目まで知識の向上と関連性の理解を高めさせることを目標とする。	卒業後の社会活動および貢献を踏まえ、社会人力を育成するために教養の知識や社会理解を高め、課外活動へ積極的に参加することを目標とする。	経済が世界レベルで動いている現在、世界共通言語である英語や各種文化圏の理解が重要である。そのため、語学力の向上や異文化への理解を深めることを目標とする。
実行サイクル	___ 4 ___ 年サイクル（令和3年～令和6年）	___ 4 ___ 年サイクル（令和3年～令和6年）	___ 4 ___ 年サイクル（令和3年～令和6年）
実施 スケジュール	1～2年時：基礎科目の理解を深める。 2～3年時：専門科目の理解を深める。 3～4年時：各科目の関連性を理解し、卒業論文などに展開する。	学年問わず：部活、同好会、学科統一本部など。 1年時：フレッシュマンセミナー、共通演習、教養科目など。 2～4年時：各種演習科目、学内セミナーなど。	1～3年時：英語の選択科目を受講する。 E-learning や English cafe など課外科目をできるだけ受講または参加。短期・長期留学に積極的に参加する。 4年時：各種発表会で発表を行う。
目標達成を測定する指標	全体、学年、学期における GPA 平均値と分布の状況から総合的に評価する。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。その他は参加状況、活動状況、活動により得られた能力項目などアンケートなどを実施して評価を行う。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。留学などはどの地域で何人が活動したか、その内容も含めて評価する。また、各種発表会では会の公益性、レベル、発表内容などにより総合的に評価を行う。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	学生の基礎科目および専門科目の理解度が高まっている。学部1年生の成績が向上している。	課外活動に積極的に参加するように指導している。	英語科目の単位を取得しており、留学希望者に対しては適切に対応している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・適切な授業を行っている。	【長所】 ・多くの学生の社会人力が高まっている	【長所】 ・なし
	【特色】 ・複数の教員で適切な授業の遂行をしている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・GPA 下位者	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・英語の学力が低い。
	【課題】 ・GPA 下位者をなくすための指導、授業改善	【課題】 ・なし	【課題】 ・英語の重要さを認識させる。
根拠資料名	GPA	GPA 部活、サークル、統一本部名簿（学生課）	TOEIC 分析データ

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学生が研究室に入室するまでに研究室を立上げ、十分な研究活動体制を整えるとともに、研究を遂行する。	得られた研究成果を学会発表、シンポジウム、学会誌などで情報公開し、関連研究者などに情報を提供するとともに、一般の方々にも分かりやすい情報伝達手段で公開を行い幅広く理解してもらう。	学内の研究室またはセンターおよび学外の研究機関や企業などと連携し、課題に即した解決法の選抜および遂行を進める。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和5～令和6年）	____ 2 ____ 年サイクル（令和5～令和6年）	____ 2 ____ 年サイクル（令和5～令和6年）
実施 スケジュール	1年目：研究に必要な機器の設置および試薬、器具などの確保および管理体制の確立。実験の遂行。 2年目：研究計画に基づいた研究の遂行。	1年目：研究遂行後の発表手段の検討など。 2年目：学会発表、シンポジウム発表を行うとともに学会誌などに投稿・発表し情報公開を行う。また、一般の方々向けに情報公開なども同時に進める。	1年目：企業や研究機関への共同研究の打診や受入れ。 2年目：共同研究の遂行。
目標達成を測定する指標	研究環境の充足割合を数値化して評価するとともに、研究が計画に対してどの程度進んだかを評価する。	発表の場、発表手段、数などを考慮して総合的に評価を行う。	研究の価値、企業や研究機関の規模、社会貢献度などから総合的に評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各研究室で十分な機器の設置および試薬、器具の確保ができ、研究が十分遂行できる状態になっている。	研究内容について関連学会やメディア、SNSで発信している。HPでの学科情報（論文公開、学会賞、インタビュー記事等）を適宜更新している。	学内研究室間および学外の研究機関および企業などと十分な共同研究を遂行することができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・学会誌への投稿など十分に行った	【長所】 ・学内、学外で複数の共同研究を行った。
	【特色】 ・なし	【特色】 ・微生物系の特色ある学会、学会誌で情報公開できた	【特色】 ・幅広い分野での共同研究対応を行った。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	機器備品リスト（会計課）	業績（学務課）、学科HP ブログ（入学センター） Instagram、Twitter	業績（学務課） 共同研究、受託研究、寄付など（総研）

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	各種研究機関、企業などに対して共同研究や連携などを行い、相手（共同研究者など）が合理的に課題を解決することに関与することを目標とする。	教員の専門性を生かし、各種方法を用いて一般の方への微生物およびその周辺領域の知識、理解の向上に努めることで社会に対する貢献を行う。	
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和 5～令和 6 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 6 年）	_____ 年サイクル（令和 ____ 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	1 年目：課題の収集と計画の立案。 2 年目：課題解決に向けた手法の開発、試験など。	● 公開講座や出張講義・実験などを行う。 各種メディアでの情報公開。	
目標達成を測定する指標	共同研究または連携先の課題に対する充足度で判断を行う。	回数や参加人数、教育貢献度などにより評価する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各機関、企業などと十分に共同研究を遂行した。	メディアで情報公開を行った。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・
根拠資料名	共同研究、受託研究、寄付など（総研）	HP のニュースリリース	